

安部公房にとってのロボット文学

——短編小説「R 62号の発明」をめぐって——

ゴーシユ　ダステイダー、　デバシリタ

一　はじめに

安部公房の短編小説「R 62号の発明」は一九五三年（昭和二八年）に『文学界』に発表された。この時期、二九歳の公房の世界観は戦争体験から時間を経てかなり変わってきており、公房は、後に言及するように、ある左翼系の文学サークルに加入し実験的な作品を書き始めていた。

安部公房の出現は、戦後の混乱期を示す粗末な紙に粗悪な印刷で作られたにせよ、何か断然新しい、例えて云えば異空間から送られたメッセージのような新鮮さであった。彼の小説作品は、発想と素材の新鮮さに加えて表現の内容が日本の過去のあらゆる文学から切れていた。ここで彼の内部の自由が発する根源があったのである。¹⁾

「R 62号の発明」もそうした実験的な小説の一つであり、戦後の日本社会・産業がようやく復興し、アメリカ産業の急速な導入とともにテクノロジ―が人間世界を支配するようになっていくことを批判する姿勢を明らかにしている。

「R 62号の発明」はR（ロボット）に身を売った男の心証が描かれている。もともとこのRは「…レイスすなわち人類のR、ルールならびにレインすなわち支配と権力のR、リッチすなわち富のR…」²⁾「復古のR」「植民地復活のR」

「正義もしくは右翼のR」と多様な意味が与えられている。やがてR 62号は人間たちの意図を超えて自らの主張をはじめるといふ二一世紀に通ずる寓意がいち早く提出されている。

このように、批評家、学者たちはこの作品のRの行動と思念にさまざまな意味が多義的に重ねられてると分析し、したがってその解釈は読者に任ざれていると評価する。本論文においてもまた、多義的な行動と思念を背景としたRの解釈を最後に提示したい。まず作品の筋立ての冒頭を見てみよう。主人公は失業してから絶望し、自分の体を実験の材料として売る。

死ぬつらさより、生きるつらさのほうが、大きいのです。(三〇一頁)

彼は作品の始まりにおいて、産業社会に受け入れられない、あるいは反発しているために、疎外された孤独の境遇にある者と設定されている。そのために、〈生〉ではなく〈死〉を選ぶことを逆説的に解放の比喩とみなす。それゆえ彼は、自分の死体をR（ロボット）として売ることにより、産業社会からの脱出、あるいは反逆を試みる。公房は一九五〇年前後に左翼系のサークル「夜の会」³に入会し、それにともなつて近代主義、共産主義、民主主義、社会主義、自由主義といったさまざまなイデオロギーの影響を一挙に受けたと思われる。しかも会の価値観が共産主義、社会主義に傾いていたために、アメリカ型の自由主義、民主主義、さらには産業社会のテクノロジー化は公房のなかで批判的に受容されたといえよう。

当時は日本社会にとつて最も重要な転機であり、これらの左翼系知識人の運動は社会革命の理論と実践に活気を与えた。公房文学にも左翼系の政治的傾向は強く表わされ、敗戦後の日本が直面したさまざまな課題が反映していると思われる。敗戦後という時代は、日本の歴史のなかで不安定な時期であり、国民の精神的・心理的状況を混乱させ、日本の伝統的価値観と西洋の文化——というよりも、徹底的にアメリカ型資本主義を機軸とする文化・産業・商品——が衝突し、どちらを選択するかに関して誰しもが戸惑っていた。このような状況にあつて、文学は重要な役割を果たしたといえよう。絶望した各々の人々に新しい観念・価値観を与え国家の意識を強め、日本の将来の可能性の世界に導いた。それゆえ日本の再

建において文学の位置を見逃してならない。

安部公房の全作品のなかで、主人公は「自分自身はどのように生きたら良いのか」と問いかけている。「R62号の発明」の主人公も失業者になってから同じ問題を抱いていた。公房のいくつかの作品では舞台が都市空間のなかに設定され、主人公が差し迫られているこの問題に関して、それでは読者自身はどのように判断すべきかが作品のテーマとなっている。それゆえに公房の作品は多義的なのだ。この作品の時代は、アメリカ型の産業社会が大量に移入され、テクノロジーの発達と共に人間の労働力そのものの価値が次第に低下していた。この作品では、産業の高度化、労働力の価値の低下、産業からの人間の排除、失業などといった問題を整理したり、解決したりしていきながら、結果では、ロボット化した主人公は逆し、資本家を殺害する。本論文は「R62号の発明」を媒介としてテクノロジーと人間の関係を検討し、理想的な共存は可能であるのかという問題を目的とする。

二 ロボット文学ーカレル・チャペックの戯曲『R・U・R』を中心に

「R62号の発明」では、ロボットは人間社会を支配し人間の労働力の尊厳を侵しているメタファーとなっている。したがってこの作品の出発点としてロボット文学の背景を検討し、この作品の成立と繋げて考える必要がある。

ロボットの語源は一九二〇年にチェコスロバキアの劇作家カレル・チャペックによつて発表された戯曲『ロッサム万能ロボット製造会社』（以下『R・U・R』）にさかのぼる。彼の兄ジョセフ・チャペックが「ロボット」という言葉を作品に使うように言ったとされている。チェコ語で「ロボタ」は強制労働を意味する。このチャペックの戯曲は日本でも非常に話題になり、一九二三年に宇賀伊津は『R・U・R』を翻訳し、鈴木善太郎によるその紹介記事「労働者製造会社」が『東京新聞』に掲載されるほどだった。一九二四年になると、築地小劇場で「人造人間」（原作『R・U・R』）が上演された。

『R・U・R』のストーリーは、人間労働者の代役をつとめさせるために、空想的な科学実験によつて安上がりで素直なロボットを作ることから始まる。その結果、大量のロボットの生産により、人間の労働は必要ではなくなる。しかし、ロボットは当初の予定に反して兵隊として戦争に使われるようになり、使用者の命令を忠実に実行して無差別に人間（兵

隊と一般市民)を殺し始めた。そのためにやがて彼らロボットは人間の無能力を憎むようになり、地球上の人間は数の増えたロボットに滅ぼされるのである。ロックスム・ユニヴァーサル・ロボット製造会社の社長ドミンは、人間に労働のないユートピアの世界を与えようとしたが、逆にその幻想は(自らを含む)人類を全滅させてしまう。そして最後には、ロボットのアダムとイブが誕生しロボット類の世界が生まれるという皮肉な警告で結ばれる。

『R・U・R』と『R62号の発明』を比較すると、いくつかの類似点に気づかされる。例えば学者が人工的方法で人造人間を作り出す。それはロボットであるが、外見は人間と同じであっても、中身は人間と違って、ロボット化されている。彼らは喜怒哀楽を感じずる心を持っていないし、肉体的苦痛や死の恐れもない。このロボットの概念は同じである。しかし、両者のテキストには人間存在に対する見方に相違があると思われる。すなわち『R・U・R』のテーマは大量のロボットを生産し人間の仕事をすべて受け負ってくれるというもので、その結果、労働は全部ロボットによって行われるために人間生活は楽になり、皆は人生を楽しむことができる」とされている。ロボットの存在は人間より劣等であり安上がり労働として描写されている。それに対して『R62号の発明』では、学者は、人間存在にはまったくの価値がないので、すべての人間を改造してロボット化すれば、産業社会にとってきわめて有益であるという理念を抱いている。

理論上からはぼくたちはどんな複雑な仕事をする自動機械でもできるわけですが、コストと能率の点を考すればそれほどばかりが必ずしも目的になかったことでない。むしろ一番コストの安い人間をどう利用するかということ、そこに問題があるので。だからぼくは、人間にそのような能力を機械の法から強制し、しかもふんだんに人間をつかうような機械、ということどころに焦点をあて、このような人間合理化の機械を完成したのです(……)。(二二二頁、傍線筆者、以下同)

ここでは、産業社会そのものに絶対的価値が置かれ、人間がモノ化するという点に焦点があり、産業の全行程が機械化されることによって人間の労働力・創造力のアイデンティティや価値が否定されている。この理念は明らかに資本家のそれである。「一番コストの安い人間」という発想は人間より機械の方が優れているという考え方に基づき、産業社会のオートメーション化によって、まさに資本家にとつての理想の世界が生まれるのである。ロボットは人間を合理化してできた機

械であり、へ人間十機械ⅡロボットへこそがR62号なのである。普通の人々は機械の存在が人間にどのような影響を与えているのかを気にかけていない。この問題が長期的にどのような脅威をもたらすのかということが「R62号の発明」という作品が訴える警告になっている。その警告の表現は、二つのテキストで一致している。つまりここでは、人間の機械化に焦点が当てられ、将来の人間の危機が予言されている。その結果が人間によって作られたロボットが反乱を起こし人間を殺すというものである。

『R・U・R』のほかにも、一八九七年にはH・G・ウェルズの『透明人間』が発表され、一九〇七年にはアメリカで機械人形をテーマとした作品『機械仕掛けの人形と器用な召使』が映画化された。次いでSF『フランケンシュタイン』（一九一〇年）、『電気脚』（一九一二年）も映画化された。一九一五年に制作されたドイツ映画『ホームクルス』でもマッドサイエンティストによる人造人間の製造が主題となっている。そして同年フランツ・カフカの『変身』も発表された。当時、公房もこのようなSF作品に興味を示し、そうした関心が「R62号の発明」に影響を及ぼしたと考えられることは次の引用からうかがえる。

チャペックの『R・U・R』や『サンショウ魚戦争』はもちろん、カフカの『変身』や、ガーネットの『狐になった奥様』だって、当然SFの系列に含めて考えることができる⁴⁾。

ウェルズの著作の目的は、つねに文明批評を行うことであつたから、『透明人間』も当然一種の仮説であり、人間関係における「見る」という行為の意味が、姿を失つた人間の孤独を通じて、かなりのていどまで掘下げられていた⁵⁾。

公房がこれらの作品を読んでいたことはこのような文面から証明されるだろう。一九二九年の映画『メトロポリス』の日本公開と一九三一年のロボットブームにともない、メディアと文学サークルのロボット関心はますます増大し、新聞、映画、雑誌、小説などでもトピックの主なテーマとなった。一九四九年に手塚治虫の『メトロポリス（大都会）』というSF長編漫画が大ヒットになった。一九五〇年にアイザック・アシモフの『われはロボット』が発表された。一九五三年に「R62号の発明」が発表されたのにはこうした経緯がある。なお同年には、米ギャレット社が開発したロボットへガー

コゝも発表されている。

三 ロボットの役割とその移行

「R 62号の発明」においては、前節で紹介した冒頭部を受けるかたちで、「ロボットの役割とは何か」という疑問がそれ以後の筋立てをつらぬいている。人間をロボット化することがこの作品のテーマとなっていることは前節で指摘したが、このテーマの手がかりとなったものに一九四八から五二年の間にアメリカで盛んになったロボットミイ手術の普及が考えられる。この手術を発明したのは、ポルトガルのリスボン大学の神経科学教授エガス・モニス（一八七五―一九五五）である。その後、ロボットミイ手術はアメリカで改良され、第二次大戦後には精神病の患者に対して盛んに行われる医療法のひとつとなった。この医療によって、患者の性格が変化し別人格になってしまうということがとくに注目された。公房もこの性格の別人化には多大の関心を寄せたと思われる。

日本では、まだ戦時中の一九四二年に、国内初めてのロボットミイ手術が新潟医大外科の中田瑞穂教授によって行われた。当時は社会的反応がそれほど出なかったようだが、戦後になってから、アメリカ医学の影響を受けることでロボットミイ手術は盛んに行われるようになった。そこでもまた、精神病の人間の性格を変えることが目的だった。この医学界の動向はこの作品の成立時期とほぼ同じであり、医者資格を持っている公房の関心を引いた可能性がある。しかし、この点に関する先行研究はまだ行われていない。

ところで、ロボットミイの〈ロボ (LOBO)〉と〈ろうのは中肺葉や前頭葉と言ふときの「葉」〉であり、ヘトミイ (TOMY) は「切断」である。したがって、〈ロボトミイ (LOBOTOMY)〉は一般に「全部前頭葉切」と和訳される。本作品のなかに行われている手術も、ある程度ロボットミイ手術と似ているように思われる。

(……)「脳硬膜を開けることだ」と男は目ばたきで知らしてくれた(……)そら前頭葉が見えた、脳圧が高いね、吸引器！(……)それ、どうだい、世界がゆがんで見えないか？5号へらで、君の脳をひっくりかえしているんだ。脳下垂体が見えているぜ。面白いもんだね(……)(三二〇頁)

「もうぼくは感情がなくなったのですか?」(……)「そんなことはないただ純化されただけさ。さっぱりした気分だろう。」(三二〇頁)

ロボットミイ手術を背景とした、こうした手術によって、主人公は彼の脳を変化させ、それまでのさまざまな苦悩から解放される。このようなストーリーの展開からも、「R 62号の発明」がロボットミイ手術の問題を十分に受けとめていると考えてよいだろう。R 62号の脳を手術しロボットに変化させる。人間のロボット化ということはチャペックの作品になかったもので、このテーマには同時代のロボットミイ手術の知見が役立ったわけである。こうして本作品の「Rクラブ」の社長はロボットは人間より能力が優れているので人間存在はもう必要でないと信じるようになっていく。

機械はもはやその工学的能力で人間をこえるのみならず、自ら思考し、選択し、記録する能力さえもっている。では、ここにおいて、人間の存在理由は破滅したのであるうか。(三一九頁)

「Rクラブ」は人間の労働力をロボットが補うためではなく、人間存在を全体的にロボット化する方針を持っている。しかしその後のストーリーでは、機械の父親である人間は機械の「工学的能力」の進化により「破滅」してしまう。前節で述べたように、「R 62号の発明」と『R・U・R』の両テキストには、ロボットの能率が人間より高いために人間存在が無用になることが明らかにされている。ただし『R・U・R』でのロボットが人間の労働を減らすために製造されるものの、やがて人間存在の敵になってしまうのに対して、「R 62号の発明」では人間をロボットに変身させ、そのロボットは逆にその製造者や資本家を殺すというストーリーをとっている。両者をひとつの流れのなかで位置づけると、機械としてのロボットが人間の知識をモノ化した物体であり、忠実な仲間として作動するものでありながら、それが逆転して人間さえ機械化の犠牲になってしまおうというパラドックスが浮かびあがってくる。したがって、チャペックの問題意識は公房にも共有されていたと見てよく、ロボットの発明は社会構造を変化させ、人間存在にかかわる重大な問題を証明する。ここにロボットの役割の移行または逆転が起こる。

わがクラブの事業計画としまして、将来は機械の血液成分たる大多数の人間を、すべてロボット化するものになっておりますが、まずの手ははじめとして、技術ロボットを完成した。それがこのR62号なのであります。(三二〇頁)

この引用では機械が主体、人間が機械の部品としていわば客体に位置づけられている。しかも機械には生物的(機械の血液)性質が与えられているので、人間と機械の主客関係が逆転してしまっている。しかしロボットには心はないので、人間の性質を与えようとしても実際には難しい。

この作品では、人間と機械の主客関係は逆転され、さらにロボットは自身を支配する資本家・製造者を抹殺する。それ以上の結果は何も述べられていない。ここから多義的な解釈の余地が生まれる。支配者の抹殺はロボットのためか、それともロボット化された人間のためかということが第一義の問題となる。このようなロボットにとつての世界は実験室と工場であろう。しかしテキスト中のロボットはまだ試作段階ということで、その世界は実験室に限られる。この実験室には意外に人間社会と同じような特徴が与えられているのである。

四 実験室と社会のメタファー関係

実験室を社会の比喩として使うという手法は公房にとつて重要な意味がある。すなわち公房作品の主人公はアイデンティティの探求のプロセスにおいて通常とは異なった道を歩むようになる。実験室のなかであろうが、社会生活のなかであろうが、人間の身体は資本主義社会にとつては実験の材料、または道具にすぎないことを主張しているようだ。主人公は失業してから絶望と孤独に苛まれて自殺する気になったが、後にロボット開発している「Rクラブ」に自分の身体を売ることを決める。それは人間を疎外する資本主義社会に生きる人間の絶望的表現であろう。

武田勝彦氏は公房の存在論について次のように述べている。

だが、人はそこで、孤独からのがれようとしてはならない。必要なのは、孤独からの回復ではなく、孤独を当然のも

のとみなして、それを進んで引き受け、未知の新たな通路を探索する精神なのであるまいか。

武田氏が言っているように、「R 62号の発明」において、主人公は自分の現在の生が不安になったとき、未来に眼を向けることで、現在の不安を見つめ返し、その困難を乗り越えようとする。この作品の主人公は未知の新たな通路を探索する精神を抱いていたのである。そのために彼は「ある学生」の申し出を受け入れる。

実は私は自殺者から死体をゆずり受けて事務所に紹介し、手数料をもらうアルバイトをしているんです。それで、ぜひあなたにも、死体を売っていただくように、たのもうと思って……(三〇二頁)

この「事務所」というのは〈実験室〉であり、人間の生きたままの「死体」を利用するというのである。生きた者に「死体を売っていただくように」その体を売っていただくというのは奇妙な表現だが、その背景にあるのがロボットミイ手術である。〈生きたまま〉の死体というのは死ぬつもりになっている人間の体のことである。ロボットの製造は生体実験の材料と言うべきであって、ロボットミイ手術によってロボットに変化させられる。

労働者は機械の血液であり、技術者はそのホルモンであり、さらにわれら選民はその心臓と魂である。いかにその魂が高貴であつても、もし血液が病毒におかされたとしますなら、機械の健康がそこなわれるのは当然であり、それはとりもなおさず、文明の危機というべきであります。(二一九頁)

ここで「われら選民」というのは資本家であり、「機械(ロボット)」「労働者」「技術者」の支配者である。「選民」というのは、「労働者」「技術者」が「機械(ロボット)」と互換可能な存在にすぎないのに対して、「機械(ロボット)」を支配する高水社長の価値(「心臓と魂」)にあるからだ。それが人間はその機械の部品として描かれ、機械には人間の性質が与えられるという互換的なメタファーの意味作用なのである。〈実験室〉のなかでは、労働者や技術者は資本家のために「機械(ロボット)」を開発している。この単純な〈実験室〉の内部の人間関係が産業社会の人間関係の抽出された

メタファーとなつてゐることは言うまでもなく、そのメタファーには資本家と労働者の關係が対等の人間關係ではなく、優越と劣等という社会進化論がこめられている。まさに資本家への強烈な増悪がうかがえる。それでいて、やがて「労働者」や「技術者」は、彼らの作り出した「機械（ロボット）」によつて労働から駆逐されてしまうことになる。産業社会のパラドックスである。このような彼らの不愉快な実験によつて社会全体が乱されてしまう。それでも彼らは自分たちは偉大なる人物と信じ、失業者（産業社会からの疎外者）は実験の材料にすぎないと考えている。

サインがすんだ。じゃこれから君も一人前の死人です。（三〇五頁）

花井がR62号君の手足に次々と手錠のような金属の輪をはめこんだ（……）R62号君はベッドの台を背負うような姿勢で動けなくなつてしまつた。（三〇八頁）

実験室のなかで行われている「一人前の死人」の処理人間の動物扱いは機械的かつ非感情的である。「実験室」のなかの〈死人の群れ〉は「社会」のなかの〈人間の群れ〉等価である。しかし公房の思想にあつては、身体は他人に所有されても、精神は所有できない。精神は純粹であり内属しているので自分の個性を持つてゐる。ロボット化されていく主人公はどのように自分の個性・アイデンティティを取り戻すのだろうか。それゆえ次節では人間（労働者）が生きつゝいるこのような管理社会と人間の理性との關係についても考えなければならない。

五 管理社会における理性の支配

管理社会が工業化・産業化から生み出されることに關しては多くの学説がある。産業化の進展によつて、人間社会は全面的にテクノロジとそれを背後で操作する資本家の支配下に置かれる。ここに少数者（われら選民）の支配する管理社会が成立する。管理社会はさらに強権的な人間を上層部に据え、人間生活は束縛されていく。とくに戦後日本は社会変革の実践を目標としてテクノロジの發展に巻き込まれ、現代日本の管理社会が生み出された。「管理」の英語訳はマネ

ジメント (management)、コントロール (control)、ルール (rule) であり、たんに産業の管理にとどまらず、人間の社会生活を管理・制約するための用語でもある。それゆえ管理社会の基盤となるべき人間の「知能」と「理性」は重要な役割を果たす。このような管理社会を生み出し操作している者はきわめて少数のエリートである。公房の作品の焦点はこのようなエリートにある。公房の社会認識のデフォルメは、人間がもしも知能・理性を「制限」して利用しなければ、逆にテクノロジーそのものが人間にとって過剰となった知能・理性を利用し、結果として人間存在を滅ぼしていくというものがある。

高水が仕事台に立つと、R62号君はスイッチをいれた。……と、はじめは半坪の土台に身の丈ほどの高さだったが、たちまち倍もの大きさに広がって、のびした両袖を音もなく内側にまわし、あつという間もなく高水をすっぽり抱き込んでしまったのだ。(三三三頁)

「何をつくるつもりだったんだー」ありったけの声で叫んだが、もうその声がま近にせまったもみあう怒声にかきけされ、R62号君には蒼くひきつった顔と大きくけいれんする唇が見えただけだった。(三三五頁)

この作品のR62号というロボットも「知能」の付与によって高度なテクノロジー体現している。と同時に、やがてロボットを生み出した人間に反乱を起こし、危険な存在になっていく。しかしこのパラドックスは作家公房にとっては、むしろ有効的に用いられる。パラドックスのパラドックスといつてよいかもしれない。ロボットの逆襲は共産主義の勝利と資本主義の消滅をもたらそうとする。公房は機械化による人類の危機を防ぐために、人間が理性を失ってはいけないと主張する。人間をロボット化することを計画している「Rクラブ」のような組織は機械と人間の関係を逆転してしまう。それは人間社会に不気味に迫っている高度産業化がもたらす危機の合図でもある。「所長」はテクノロジーの進展に無我夢中になって人間存在の価値を忘れていることが強調されている。彼の理性は熱狂的な野心によって抑え込まれてしまった。こうして彼の非合理的な行動によって高度産業社会は危機的状態に置かれてしまう。

R62号はこのような社会からの解放を求めている。前節で触れたように、彼は自分の人生の行方に不満を抱き、社会か

ら逃亡しようと考えていたところ、「Rクラブ」に誘われて実験室に入る。産業社会からの疎外への反発から自由への要求にめざめ、彼は自分の身を売ることを決心するのである。ロボットミイ手術を受けることによって、人間からロボットに変わるその変身のプロセスは、主人公の側からすると、解放の経験としてみなされ、産業社会に抑圧されたそれまでの日常生活で感じていた多様な苦痛からの逃避を可能にした。しかし、ロボットに変身することは同時に人間の感性を失うことを意味し、そのため、彼を管理してきた所長を殺すことになる。所長といえども、人間性をほとんど失い暴力をなんとも思わなくなったロボットの前に無力であった。ここに込められている皮肉な警告は、理性的に行動しないなら、テクノロジーに敗北してしまうということである。

R 62号は静かに事務的に答えた。危ないですよ。前にたくさん並んだボタンにグリーンのランプがいたら、それをすぐ押して下さい。押すのが二・四秒遅れたら指が切れてしまいます。切れてもすぐ次を押して下さい。指は十本あるから十回までは指だけですむのです。十回以上押しそなたたら、胸をさされて死ぬはずですよ。(三三三頁)

R 62号が高水社長に命ずる操作は、誤れば社長の命を奪うものであった。この場面はロボット等の「テクノロジー」によって、人間を抑圧・支配する未来社会の恐怖を示している。ロボット化されている者の前に高水社長の社会的地位、知識、それにまた、これまで「労働者」や「技術者」を支配してきた資本力などもまったく無力になってしまっている。こうして自分の命をいくら助けようとしても結局は失敗する。それゆえ「テクノロジー」が人間社会に逆襲するとき、人間存在の価値をもう一度考え直すことが必要となり、人間と「テクノロジー」の複雑な関係をより真剣に熟考しなければならぬ。人間は「テクノロジ」の虜になってしまい、そこで急速な進歩に人間の「知能」「理性」が果たして追い着くのかということに疑問があることを明白にしている。このプロットの結末はもはや語られていないが、その結末の方向性は、あのチャペックの「R・U・R」のプロットのように、ロボットは人間の競争者になり人類の絶滅の原因となるというものだろう。作家は人間にテクノロジがもたらす不条理を未然に防ぐように要求している。作家公房の洞察力は感動的であり、産業社会の激しい発展によるロボット化・資本の論理による人間性の抑圧・否定という事態が抑えきれない勢いを持つてくることによって、人間は自らに對し無力になってしまふことを予見したのである。

まとめ

この作品は読者に向かつてある問題の回答を求めている。それは技術を生んだ人間は逆に技術に支配されるようになってしまい、理想的な共存は可能ではなくなるのではないかということである。公房はこの作品において技術化や資本主義によって脅かされる人間存在の危険性を告げている。

機械の設計をしていたのですが、アメリカの技術出資がきまり、仕事がなくなりましてね。死んだって解決にならな
いくらい、分かつてるが、ぼくみたいに専門化しちゃうと、まるで弱虫になるんだな。(三〇一頁)

私はまた、てつきりアメリカさんの技師が来てくれるんだとばかり思っていたもんで……この頭は完全にアメリカ製だよ。(三二二頁)

主人公はアメリカの資本化・工業化が導入されるまでは、社会にとって確約された存在であった。しかしアメリカの資本と産業化の侵入により、彼がそれまで確固として保持していた社会存在性やアイデンティティは奪われてしまう。まさに「アメリカによる技術出資」によって人間生活の混乱と人間の破壊が痛烈に批判されている。「アメリカの技術出資」、「完全にアメリカ製」というのは日本がアメリカの産業「テクノロジ」に完全に巻き込まれてしまったことを表している。

作家公房は日本の労働者が陥った危機的状況を打開するために左翼系の政治活動に参加したのである。一九五〇年に共産党に入党し主流派の支持者になった。「R62号の発明」も、共産主義の思想の影響を受けていると思われ、人間社会を分裂させた支配・被支配の関係が鋭く批判されている。しかし最後にこの〈支配・被支配〉〈資本・労働〉の関係はロボットの逆襲によって逆転する。労働者であったR62号によって社長は殺される。これは資本主義の終わり、または共産主義・労働主義の勝利として読み取れる。

作品の結末部を検討すると、ロボット化を計画している者はそのロボットの前に無力になってしまう。R 62号は高水社長の子の社員（労働者）であった。

高水の心にあるのはただ、終結した労働者たちが門を破って送電室を占領し、配電盤のスイッチを切ってくれる夢だけだった。機械のうなりにまじって、アメリカに売るな！と叫ぶ労働者たちの声が聞こえるようにさえ思った。（三四頁）

ここでは、アメリカの産業化・工業化のモデルを日本社会に当てはめようとする資本家のもくろみに対する労働者の反乱を表されている。それまで労働者を支配・抑圧してきた高水社長が労働者の助けを求める。いわば関係のパラドックスが浮かび上がることになる。そして公房自身のアメリカに対する幻想とその放棄も明らかになる。アメリカの資本主義は日本社会に導入されるならば破滅的な危機をもたらすことを指している。「アメリカに売るな！」はアメリカの「テクノロジー」が日本社会を侵入することを許さないと宣言となっている。

高水社長はロボットによって殺される。このロボットが小説の冒頭では人間であったことは無視できない。ロボットは人間として存在していたとき無名であった。それがロボットになってから名（R 62）が付けられる。人間としての彼にはアイデンティティはなかったのか。高野斗志美氏は次のように語っている。

しかし氏は、きわめて短期間に、個の自立にかかわる、近代主義的観念が、そのオペティミズムに訣別していくのである。それは植物的人間の拒否という具体的なイメージに要約するのであるが、そこにかがわれるのは、個の既成観念の打破であり、個と社会とのかっこいい関係のひいてであり、内部と外部との函数としての精神を、反既成の次元において根本的に問いなおすという姿勢である。

それゆえRを復讐（Revenge）や革命（Revolution）の意味としても解釈できる。ロボットになって資本家の高水社長に復讐することによって、ロボット化されてからR 62号の存在が認められたということは、逆に見れば、人間は高度になっ

ていく産業社会になればなるほど無力になっていくと風刺しているのではなからうか。

同時に自分もためすようにそっと聞いてみる。R 62号君はぼんやり首をかしげ、そのままどこか見ええないところを見る目つきで、かすかに笑った。所長の顔は次第に恐怖にゆがんできた。(三三四頁)

その瞬間、冬の小蠅のように鳴きながら、機械がとまった(中略)遠くで労働者たちの歌声が聞こえ、それに警官隊のトラックのサイレンが次第にまじりあっていた。(同頁)

ここがこの作品のクライマックス部分であろうが、作品全体にとつては意味深く、労働者の「歌声」と警官隊のトラックの「サイレン」が言葉そのものに対するパラドックスを暗示している。それは勝利と悲劇の象徴である。R 62号はロボットになって非人間的な社会から脱出しようとするのはパラドックスの極限表現といつてよからう。その意味からすると、本作品は人生の否定・拒否から始まり回復・解放に終わる。人間としてできなかったことはロボット化されてから可能になり、労働者(ロボット)は資本家を殺す。しかしここで概念は衝突する。技術に支配されないように警告する一方で、主人公はロボットになつたからこそ、社長を殺すことができた。彼は管理社会の外側に逸脱したからこそそれに立ち向かう力を得たのである。作家自身果たしてロボットを人間の象徴と見ているのかやテクノロジの枠と見ているのか、それとも両方なのか。疑問は読者に投げ出されている。

機械は人間より有力であり、人間にはできないことが機械(人間によって製造された)にはできるといふ矛盾が現れる。テクノロジを認めるか認めないかが本作品で議論されている一方、近代主義の波に乗るとき、産業それ自体の合理性によつて考えなければならぬ。作家はテクノロジを文化や社会の一現象、または文明の主な部分として認めているように、R 62号をテクノロジの枠としてみているのではないかと思われる。その一方人間の象徴でもあるように見ている。なぜかR 62号には管理社会に立ち向かう力はあるからだ。それゆえ論者は両方の概念が取り上げられていると信じている。しかし機械は人間の「理性」を超えて進化していく。その不条理は逆に人間にとつて危険であることをも示している。その見方を通して作家は文明社会の機械化に関する自分の意思を読者に伝えている。

※本文中に引用した「R 62号の発明」のテキストは『安部公房全作品3』新潮社、昭和四七年八月）に拠った。

注

- (1) ゆりはじめ『戦後文学のフィノミノロジー』桜楓社、昭和六二年四月、四七頁。
- (2) 同書、四七頁。
- (3) 「夜の会」は昭和三三年一月に正式に発足した。花田清輝、岡本太郎、壇谷雄高、野間宏、佐々木基一などが重要な役割を果たした。これは戦後派によるアヴァン・ギャルド芸術運動、すなわち新しい芸術運動の拠点となりコミニズムを導入していた。
- (4) 『安部公房全作品15』新潮社、昭和四八年七月、一〇六頁。
- (5) 同書、一一五頁。
- (6) 武田勝彦「国際性を探る」『安部公房全作品13（付録）』新潮社、昭和四八年五月、一〇頁。
- (7) 一九五〇年六月に共産党中央委員二四名が追放され、コミンフォルムが強く批判された。その批判をめぐってコミンフォルムは主流派と反主流派として分裂した。六月に起こった朝鮮戦争、マッカーサーの共産党幹部追放などにより両派の抗争はますます激化し、政治上だけでなく文学サークルでも大きな話題になっていた。
- (8) 高野斗志美「卷末作家論——変形と仮説」『現代文学13安部公房』講談社、昭和四六年一月、四一五頁。